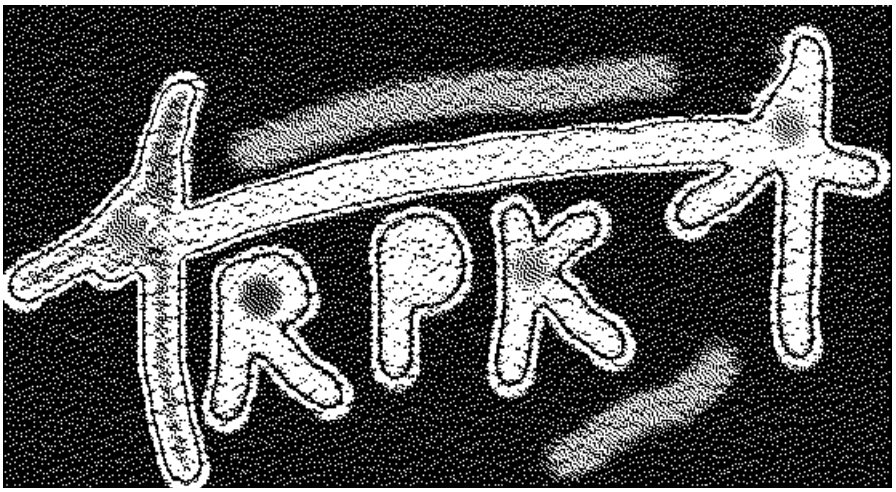
RENCONTRES 32-2

Thème 1 : **Les objectifs de l'enseignement du français.**
フランス語教育の目的とは

Thème 2 : **Les leçons spéciales. L'ouverture, la clôture et la réactivation de la classe.**
特別な授業
― 教室を開く、閉じる、再活性化する ―



関西フランス語教育研究会

Rencontres Pédagogiques du Kansaï

2018

Illustration de la page de couverture : Christian Pelissero

Sommaire　目次

Communiqué 2

Présentation des thèmes 4

« Article Thème 2 »

惟村宣明 (KOREMURA Nobuaki)
フランス語学習、入門から初級・中級への誘い 6

« Article hors thème »

有富智世、喜久川功、安藤博文、内田智秀、服部悦子、山田敏之
(ARITOMI Chise, KIKUKAWA Isao, ANDO Hirofumi, UCHIDA Tomohide, HATTORI Etsuko, YAMADA Toshiyuki)
授業内活動と自主学習を活性化する学習支援ツールの一体化 －デジタル教科書・デジタル教材・e ポートフォリオ・教材ダウンロードー 11

Remerciements 16

お詫び

RPK2018 に参加された皆様、

秋晴の候、山々も秋の装いを始める頃となりました。皆様におかれましては、お変わりなくご活躍のことと存じます。

さて、関西フランス語教育研究会では、3 月末の大会の成果を踏まえた紀要を、参加者の皆様に毎年お送りしております。しかしながら本年の論考には、運営委員会の手違いにより、有富智世さん、喜久川功さん、安藤博文さん、内田智秀さん、服部悦子さん、山田敏之さん共同執筆の論考『授業内活動と自主学習を活性化する学習支援ツールの一体化 ーデジタル教科書・デジタル教材・e ポートフォリオ・教材ダウンロードー』と、惟村宣明さんの論考『フランス語学習、入門から初級・中級への誘い』の二件が掲載されておりませんでした。ここに運営委員会一同、深くお詫び申し上げます。

二編の論考は RENCONTRES32-2 として RPK2018 の参加者全員に送らせていただきます。大変申し訳ございませんでした。執筆者の皆様には多大なご迷惑とご心配をおかけしましたことを、重ねてお詫び申し上げます。

今後このようなことが二度と起こらないよう、万全の対策を進めていきたいと存じますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

2018 年 9 月吉日

ランコントル運営委員会一同

COMMUNIQUÉ

Avis aux participants aux Rencontres Pédagogiques de Kansai 2018 et aux lecteurs du bulletin Rencontres 32.

Rencontres 32.2

Nous, membres du Comité organisateur des Rencontres Pédagogiques du Kansai, offrons nos excuses les plus sincères à Mesdames et Messieurs Nobuaki Koremura, Chise Aritomi, Isao Kikukawa, Hirofumi Ando, Tomohide Uchida, Etsuko Hattori et Toshiyuki Yamada, dont les articles ont été égarés et sont maintenant publiés, avec retard, dans ce bulletin Rencontres 32.2.

Nous sommes conscients du préjudice que nous leur avons causé, qui est entièrement dû à des erreurs de notre part, une mauvaise gestion de fichiers électroniques, un manque de contrôle sur nos procédures d'édition et une communication déficiente entre membres du Comité.

Nous nous engageons à mettre en place un protocole de vérifications pour que pareille bévue ne se reproduise plus.

Nous prions également tous les lecteurs du Bulletin Rencontres d'accepter nos excuses.

Osaka, septembre 2018

PRÉSENTATION DES THÈMES

Thème 1 : Les objectifs pédagogiques de l'enseignement du français.
フランス語教育の目的とは

« Pourquoi étudier le français ? » Comment répondre à cette question au Japon ? Dans les universités japonaises, nous nous plaignons de la réduction des heures de français en deuxième langue étrangère. Normalement, nous n'avons que des cours d'une ou deux heures par semaine. Même si l'on peut obtenir assez d'heures pour enseigner le français, ou si les étudiants peuvent acquérir une bonne méthode pour étudier une langue étrangère, comment les apprenants peuvent-ils exploiter leur talent dans la société japonaise ?

Il est parfois difficile de motiver les apprenants japonais parce que notre société n'accorde pas beaucoup d'importance au français. Nous devons donc réfléchir de nouveau sur les objectifs pédagogiques de l'enseignement du français. Il est aussi important de mieux connaitre les relations entre le français et la société japonaise pour motiver les apprenants. Pour ce thème, nous invitons les discussions sur les objectifs pédagogiques de l'enseignement du français au Japon. Devons-nous simplifier les cours en fonction du temps limité qui nous est donné ? Ou élevons-nous les capacités en langue française des étudiants autant que possible ? Ou alors nous trouvons-nous un autre objectif que le niveau de la langue ? Quelles recherches pouvons-nous mener sur les relations entre la langue française et la société japonaise ? Afin d'ouvrir cette discussion, nous attendons vos ateliers sur vos problématiques, vos opinions ou vos objectifs.

「私たちは何のためにフランス語を勉強するの？」という学生の率直な問いにどう答えればよいのでしょうか。フランス語は多くの教育機関で「第二外国語」に位置づけられており、与えられる授業時間は週に 1〜2 時限ほどです。このような状況では、高度で実践的な言語運用能力の獲得を目指す FLE のメソッドも、学習時間の制限によって十分に有効性を発揮できません。 また、仮に長い授業時間が確保され、学生のフランス語運用能力を高めたとしても、日本社会という環境で学生がその専門性を活かすのは容易ではありません。

フランス語教育を取り巻くこのような状況の中で、学生に初めから高いモチベーションを望むのは難しいでしょう。この状況から漸進するために、まずは我々教員自身が日本におけるフランス語教育の目的を改めて問い直し、フランス語と社会の繋がりを見つけ、学生のモチベーションを高めていくべきではないでしょうか。このテーマでは、日本でのフランス語教育の目的についての議論を募集します。我々は時間制限に合わせて授業や学習内容を平易化すべきな

のでしょうか。それとも可能な限り学生のフランス語運用能力を高めることを目的とするべきでしょうか。あるいは語学力向上以外のところに目的を見出すべきでしょうか。フランス語教育と日本社会の繋がりをどのように模索していくべきでしょうか。多様な観点からの問題提起をお待ちしております。

Thème 2 : Les leçons spéciales. L'ouverture, la clôture et la réactivation de la classe.
特別な授業　―教室を開く、閉じる、再活性化する―

Dans un semestre, certaines leçons sont plus importantes que d'autres. La première leçon, les premiers contacts avec les apprenants doivent évidemment être bien préparés, mais il en est de même de la dernière, qu'elle soit un test ou des adieux, car elle peut laisser une impression durable aux élèves.

En outre, d'autres moments au sein même du semestre requièrent parfois une importante réflexion pédagogique, par exemple un cours pour remotiver une classe peu réactive, une séance après un examen intermédiaire, la leçon qui suit un moment difficile en classe.

Que faire pendant ces leçons spéciales ? Comment se préparer pour organiser, lancer, maintenir et relancer le rythme d'une classe, comment bien la conclure ?

Pour ce thème, qui se veut concret, dynamique et pratique, nous attendons des récits d'expériences, des échanges de techniques pédagogiques, de conseils de gestion de classe et de stratégies d'enseignement, qui nous permettront tous de mieux nous former, d'améliorer notre enseignement, son efficacité et le plaisir que nous en retirons.

一学期の中で、とりわけ重要な授業があります。例えば、初回の授業は学生と初めて対面する機会ですので、当然ながら多くの準備と工夫を必要とします。また、最終回の授業も、評価の機会であったり学生との別れの場面であったりするため、学生の思い出に残る大事なものです。

学期中のその他の授業に関しても、特別な工夫が必要とされる場合があります。例えば、反応の少ないクラスを再び活気のあるクラスにしたいとき、中間試験の後などに何か普段とは違う特別な企画を考えたいとき、なんらかの理由で進行に困難が生じてしまったクラスを立て直したいとき、みなさんならどのような実践を提案されるでしょうか。

こうした「特別な授業」を組み込みながら、ひとつの教室をどう準備し、設計し，全体の流れに配慮しながら運営し、閉じていくのか。

この問いに関して具体的・実践的な議論を行うため、そして私たちの授業を向上させ教えることの喜びを見出していくために、授業の体験談、教授法に関する提案、授業運営の工夫やストラテジーに関するご意見などをお待ちしています。

Thème 2

フランス語学習、入門から初級・中級への誘い

惟村　宣明

KOREMURA Nobuaki
東海大学
koremura@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

1. はじめに – 東海大学フランス語教室の教育理念と目標

東海大学国際教育センター国際言語教育部門に属するフランス語教室は、以下のような理念と目標を掲げ教育活動を行っている。

1) 人格教育 : フランス語の鍛錬を通じ国際的視野に立つ、人格、教養ともに優れた人間の育成を目標とする。
2) グローバル社会に求められる人材育成 : それぞれの専門分野を持ちながら、複数の言語により世界に発信できる人材育成を目標とする。
3) フランス語発信力の育成 : 4 年間の継続学習で DELF B1、仏検 2 級以上のフランス語力を身に付けることを目標とする。

近年我々の学生たちは、全国規模の弁論大会で優勝や上位入賞を果たし、仏検や DELF でも良い成果を上げ、臨機応変の応答力と問題解決能力を発揮し、就職でも高い評価を得ている。このような教育理念を掲げる我々も、大いに勇気づけられている。ところで、これらの目標を達成するためには、学習者が、大学 4 年間継続してフランス語を学び続ける必要がある。そこで、最初無自覚であった学習者のモチベーションをいかに高め、高いレベルのフランス語発信力を身に付けるためにどのような教育システムを構築し、いかにして自立的学習を促すかが問題となる。我々がこれらの問題にどう取り組んでいるか、以下に報告したい。

2. 東海大学のフランス語教育システム

2012 年度以来東海大学では「特定プログラム」の制度が導入されている。これは、志願者を選抜して特別授業を受講させ、ダブルメジャーの資格を得させるシステムである。この制度のおかげで我々は、第 2 外国語であっても主専攻並みのレベルに到達するカリキュラムを用意できるようになった。このプログラムは、2018 年度より「副専攻アドバンス」と改称され、カリキュラムも一層充実し、選抜制度は廃止され、より多くの学生がこの資格を得られるようになった。新カリキュラムでは以下の授業が開講される。

2018 年度以降新カリ開講科目(各科目名に付く「フランス語」のタイトル部分を省略)
入門 (学習 1 年目) : 入門 1・2 / 会話入門 1・2 / 言語と文化 (日本語による講義)
初級 (学習 2 年目) : 初級 1・2 / 会話初級 1・2 / 講読初級 1・2 / 検定初級 1・2
中級 (学習 3 年目) : 中級 1・2 / 会話中級 1・2 / 講読中級 1・2 検定中級 1・2
表現法 1・2
上級 (学習 4 年目) : 上級 1・2

また我々は、フランス語学習歴に応じた履修モデルと学習到達目標を以下のように設定した。

学習 1 年目 : 入門・初級授業を受講。仏検 5 級・4 級、DELF A1 レベルに到達。
学習 2〜3 年目 : 初級・中級授業を受講。仏検 3 級・準 2 級、DELF A2 レベルに到達。
学習 3〜4 年目 : 中級・上級授業を受講。 仏検 2 級以上、DELF B1 以上のレベルに到達。

ただし初級の授業は学習歴が半年あることが必要であり、実際は 1 年目の後期より履修が可能になる。ここで我々が先ず重視するのは、「フランス語入門 1」を履修する学生をいかに継続学習させるか、そして中級に到達するために、どのようにして自立学習を促すかの 2 点である。

3. 入門レベルから初級レベルへの誘い

先ずここで、東海大学で初めてフランス語を履修する学習者の特徴を挙げておきたい。我々の学生の多くは、この言語を学ぶにあたって、漠然とした期待を抱いているが、明確な目的意識を持っているわけではない。授業態度はきわめて真面目で、教師の指示や練習問題の答えに細かいメモを取る。しかし、わからないことを質問したり、意見を言ったりすることは少なく、教師がクラスの全員に問いかけても積極的に答えようとする学生は稀である。一人一人を指して発音を繰り返させたり答えを言わせたりする場合、自信なさそうに小声でつぶやくのが精いっぱいで、黙っていたり「わかりません」と返事することも多い。答えを間違えた時、非常に恥ずかしそうな態度をとる。彼らは間違うことを大変恐れるが、間違えないようしっかり勉強する努力はしていないようである。また、几帳面にメモをとるが、その内容を覚えているわけではない。彼らはよく「暗記が苦手である」と言うが、その苦手意識を努力しないことの口実にし、覚えることを拒否しているようにも見える。すなわち、きわめて受動的な「受講者」であり、しっかりした語学学習法を身に付けていない者がほとんどである。これらの「受講者」に、言葉の学習の魅力を伝え、積極的な姿勢を引き出すことが、教壇に立つ我々の最初の使命となる。

「教壇に立つ者」とは古い言い方で、今の言葉で言えば « animateur(trice) » となるだろう。我々はこれらの受動的受講者の積極性を引き出すにあたって、次のような方法を用いている。

まず我々が基本とするのはグループ学習である。これは、教育における双方向性、協働性の重視から昨今大変推奨されている方法である。東海大学では学部学科の違う学生が一つのクラスに集う。様々な視点を持つ者が出会う新鮮さは魅力であり、グループ学習は一層効果的な方法となる。グループの人数は、我々の経験では 3 名が適正である。4 名にすると 2 名ずつに分裂しやすく、5 名だとほとんど発言しない人が出る。2 名では相性の問題も出てくる。3 名だと

お互いが何らかの形で協同作業に関わらざるを得なくなる。この際我々が注意を払うのは、グループ内に、お互いの理解を補い合い教え合い、間違いを恐れず発言できる雰囲気を作ることである。協同作業を通して、様々な専門と視野を持つ者同士が親しくなれば、母国語外国語に関わらずコミュニケーションをとることの大切さ、楽しさがより良く理解され、社会性をも培うことができる。同じフランス語を学ぶ者同士という仲間意識が高まり、授業で会うことの楽しさから欠席者が少なくなる。欠席しないということが語学学習の大きなポイントであるから、学習効果は一層高まる。仲間同士の関係をさらに緊密なものにし、競争し切磋琢磨し合う気風を作り出すことが大切であると我々は考える。

我々がグループで実施する協同作業は、運動と体得を基本とするアクティビテである。反復練習を行い、ゲーム、jeu de rôle なども利用して、授業中の多くの時間、学習者が発声、発言、運動を行って学習活動に参加している状況を作り出す。そして暗記作業や文法、語彙の理解なども協同で行う。例えば、アルファベの暗記などもリズムをつけ、繰り返し発声練習を行い、グループ内で確認するようにする。我々は、「忘れることは自然であり、忘れることを恐れてはいけない。ただ声を出して体得するように」と助言する。忘れた所を互いに補い合うようにして反復練習すると、2〜3 回の授業でクラス全員が暗唱できるようになる。逆に協同作業を行わなかったクラスでは、1 年たってもアルファベを言えない場合がある。この方法は学習者にとって新鮮なやり方のようで、暗記法のヒントをつかみ自信をつけるきっかけとなっているようである。我々はさらに進んで、1 から 100 までの数字や約 46 個の動詞の活用を 1 学期間で暗記させるようにしている。実践会話に関しては、文字に頼らず聞くことに集中し、繰り返し使って覚えることを心がけるようにしている。ある表現を完全に身につけてから各単語の綴りを確認すると、自然と音と綴りの関係を見抜けるようになる。学習者には当初多少のストレスがかかるものの、やがて練習したフランス語の表現を無意識に使えるようになる。

大学という教育現場において、単に語学の技能を身に付けることに専念するばかりでは若い学習者の心をとらえることはできない。彼らの知的関心を喚起し、言葉の学習を通して驚きと発見があるようにしなければならない。Bonjour という言葉一つを覚える際も、相手の目を見て、親しい者同士だと bise をするフランス人しぐさについて話し、買い物をする時店員と自然にかわす挨拶であることなど、使われる場面について知らせ、petit déjeuner, déjeuner, dîner のような単語に出会えば、フランス人が普段どのような食事をするか、食事の際の「いただきます」と「ごちそうさま」のような言葉はどうなっているか考えさせるようにする。季節の単語を覚えるときは、春を告げる花や鳥、夏のいつまでも沈まぬ太陽、秋の枯葉の音、冬の様々な行事など、異国の異なる風景を想像させる。そしてなによりも、言葉を操るときの考え方の違いに関心を向けさせる。なぜフランス人は論理性明晰性を尊重し、日本人は和を前提とした表現を用いるのか。フランス人と日本人の長所と短所、それがいったいどこから来るのかなど考える機会を与える。つまるところ、言葉を通して一つの世界に誘い、翻って自分たちとは何者かということを考えるきっかけとする。言葉の学習は未知の世界への冒険となり、冒険を好む若者たちは、進んで自らを鍛えようと思うようになるだろう。

我々は教室の中に、多彩な人々が集う驚きに満ちた一つの世界を作り上げ、その空間で若者が進歩できるように気を配る。しかし、初学者たちは自らの進歩に気づかないし、言葉という広大な海の中で何をしてよいかわからない状態にある。我々は « animateur(trice) »であると同時に « pilote »であることを心がける。フランス語を学ぶ上での中継地点、達成可能な目標を先ず示すようにする。グループ内での互いの評価や、ポートフォリオにより自己評価をさせながら、

仏検や DELF などの近い目標を達成させるようにする。さらに、過去の学習者が辿った過程や成果を紹介し、彼らより学習歴が長い学生たちと情報交換する機会を与える。

1990 年代後半、東海大学のフランス語学習者の到達目標は仏検 3 級であった。2000 年代になると 2 級に合格する者が現れはじめ、2016 年には 9 名が合格した。そして、これを見た初心者たちは、ごく自然に、この級を取ることを目標とするようになった。3 級や準 2 級を取ることは、学習 2 年目の学生の目標となった。我々は歴代の学生たちのデータをとり、彼らがいかに就職活動でフランス語を武器とし、どのように評価されたか、後継者たちに伝えるようにしている。

4. 初級レベルから中級レベルへの誘い – 自立学習への道

総合大学たる東海大学で、第 2 外国語を 1 年間必修としているのは、観光学科と歴史学科の 2 学科に過ぎない。義務ではないので、少ししっかりと勉強させると半年でやめてしまう可能性がある。どのようにして授業の質を保ち、履修者数を維持するかが大きな問題となっている。教室に一つの世界を作り出し、連帯感をはぐくみ、達成感と充実感を味わった学習者の継続率は高く、1 年継続した者は最終学年まで学習を続け、大きな成果を上げる場合が少なくない。その過程を見ると、学習歴が 2 年以上ある学生は自分で工夫した勉強法を持ち、人に教えることも出来るのに対し、学習歴 1 年の者は、積極的になってはいるものの、自立的な学習が出来ていないようである。課題を与えればしっかりとこなし、成績は優秀であるが、それ以上の工夫はせず、指示待ちの傾向が強い。この傾向はここ 4～5 年の履修者で特に強まっているように思われる。何よりも目立つのは、こちらが何らかの質問をすると、教科書のどこに書いてあったか探して答えようとすることである。答えが合っていることを重視し、答えに至る過程に着目しないので、教科書なしで自ら説明することができない。このままでは語学を身に付けるにあたって限界が生ずることになる。そこで我々が彼らに、頭の中のノート作りを提案するのである。

「頭の中にノートを作る」ということは、頭の中に検索可能な知識体系を持つことである。この段階の学習者たちには、« pilote »たる我々がある程度やり方を示してやる必要があるだろう。特に文法事項に関して、我々はまず、必要な情報を項目化・数字化し、複雑なものはイメージ化して覚えるように助言する。例えば、複合過去形の作り方は、助動詞として avoir を取るか être をとる 2 つの場合があり、être を取るのは往来発着生死の自動詞と代名動詞の 2 つの場合であると頭の中で整理させる。すると真面目な我々の学生たちは、言われたままの日本語の説明を繰り返して理解した気持ちになるので、今度はフランス語の例文を挙げて説明するよう求める。「être を助動詞として取る場合は、例えば Je suis né(e) le 14 mai. と Je me suis levé(e) à six heures. のような 2 つの場合。avoir を取る場合はその他の動詞で、例えば Je n'ai pas pris le petit déjeuner. のようになる」と説明することができれば、過去分詞の性数一致や、代名動詞における語順、否定文の作り方などの、初心者が戸惑う情報も一緒に覚えることになる。自分のことを表現した単純な例文は忘れにくいし、わずかな暗記で多くの情報を頭の中から引き出すことができるだろう。

数値化することによって知識体系の骨格を作り、例文によって文法情報を引き出すことができるようにした後、我々が次に行うアクティビテは、反復練習によってこの知識体系を固定し、無意識に運用できるようにして、学習者が自ら表現できる事柄を増やすことである。複合過去の場合、先ずグループ内で助動詞 avoir をとる動詞を集めさせ、その過去分詞を確認する。次

に 1 人のメンバーが、集めた動詞を用いて簡単な現在形の例文を述べ、他のメンバーの 1 人が即座に複合過去形にして答えるというアクティビテを行う。例えば Tu finis tes devoirs. と例文を言われたら、Tu as fini tes devoirs. と答える。être を取る動詞も同様にして Elle rentre chez elle. という例文を聞いたら Elle est rentrée chez elle. と応じるようにする。次第に応答のスピードを速め、次に avoir を取る動詞、être を取る動詞を混ぜて即断力を鍛える。このゲームでは、はじめ全員ぎこちない様子で、スピードをあげるとそれなりにストレスを感じるようだが、不思議なことに、数日間を置くと、Je suis parti(e) à six heures. などとスムーズに言えるようになる。我々は次に、rester や tomber における être の使用、quitter と partir の違いなど初級の学生が判断に戸惑うような場合や、性数一致の例外なども考えさせ、これらを理解した時点で、「複合過去に関する基本文法の必要情報はこれがすべてである」と宣言する。学習者はこれで少し安心し、頭の中に検索すべき情報体系があることを確認する。最終的にこれまでのトレーニングで用いた表現を使って、自分の一日をフランス語で作文し、グループ内で言い合って練習した後、全員の前で発表する。

頭の中に基本的情報があるという自信を得て、人に教えることができると確信した学習者は、与えられた学習方法を参考に、独自の方法を考えつき、それぞれの目標に向かっていく。仏検 3 級や準 2 級、DELF A2 などにも受かってくるので、さらにその先へ向かう意欲を持ち、自らの可能性を信じるようになる。

5. おわりに

入門時に仲間意識を培い、アクティビテでフランス語を体得し、「頭の中のノート作り」を体験した学習者は、これまで目に見える成果をあげて来た。仏検で顕著な実績を残した 2016 年度は、3 級と準 2 級の合計合格者が 39 名に上り、2 級には 9 名が合格した。学部学科の違う者同士が図書館や学習スペースに集い、互いに教え合う風景も今では常態化した。我々はこれまでの活動に一定の効果があったことを確信している。しかし、進歩していく過程で、問題もまた見出された。中級まで至った段階で、我々の学生は、型にはまった表現しかできず、質疑応答や自由な話し合いなどに対応できず苦労している。また、一部の者は上級に達することができたが、広範な学習者が到達できるようなシステムとはなっていない。今回は入門から中級に至る学習者の成長過程を報告させていただいたが、近い将来、より多くの学生が上級に至るシステムを開発し、成果を報告させていただきたいと思う。

Hors thème

授業内活動と自主学習を活性化する学習支援ツールの一体化 ーデジタル教科書・デジタル教材・e ポートフォリオ・教材ダウンロードー

有富智世・喜久川功・安藤博文・内田智秀・服部悦子・山田敏之

ARITOMI Chise, Université Tokoha, aritomi@sz.tokoha-u.ac.jp
KIKUKAWA Isao, Université Tokoha, kikukawa@sz.tokoha-u.ac.jp
ANDO Hirofumi, Université de Shizuoka, ad_hiro0709@yahoo.co.jp
UCHIDA Tomohide, Université Meijo, uchida.tomo@gmail.com
HATTORI Etsuko, Université Kinki, etoileo@hotmail.com
YAMADA Toshiyuki, Éditions Asahi, yamada@asahipress.com

はじめに

高等教育機関における初修フランス語「デジタル教科書・教材」の研究開発を行ってきた[1]。まず、語学教育と教育工学の共同による「教科書(紙)＋デジタル教材＋e ポートフォリオ」の三位一体型学習環境を構築した。続いて、本研究成果の「デジタル教材」を発展させ、“授業改善”および“学びの質的向上”を見込める「デジタル教科書（教員版)」の試作に至った。本教員版は、平成 29 年度、さらに有益な教育ツールにすべく授業実践を経て検討を重ねた。その結果、“デジタル教科書”“デジタル教材”“e ポートフォリオ”“教材ダウンロード”からなる教材の一体化を図り、特に「デジタル教科書」をこの一体化の要に位置づけることで、教育ツールとしての実用性を高める構想を立てた。一斉授業から授業外の自主学習までも視野に入れた“総合力を備えた教育ツール”の実現が、いま高等教育機関で求められる「デジタル教科書・教材」のあり方ではないだろうか。

本稿では、紙媒体の教科書が主流の現状に適応させつつ導入を活性化し得る「デジタル教科書（教員版)」の制作例を示し、さらに本教員版が、今後に求められるであろう「デジタル教科書（学習者版)」へと機能変換で発展できることを呈したい。

---

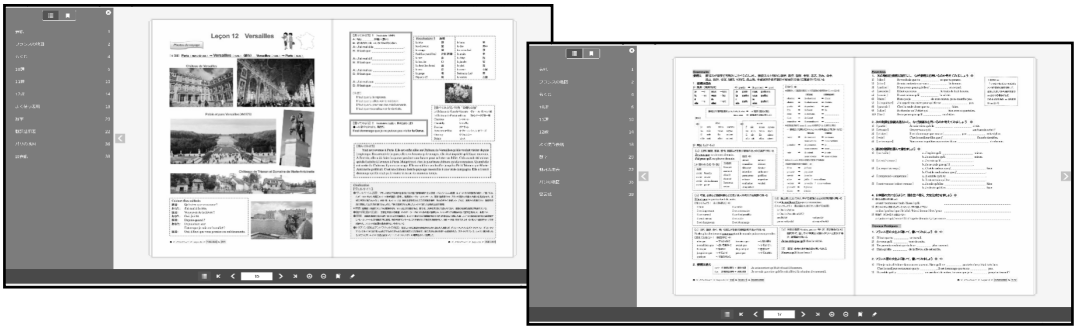
[1] 以下の論稿を参照されたい.
・「教科書連動型デジタル教材に搭載の e ポートフォリオを取り入れた評価の試み」, 有富智世・喜久川功, 関西フランス語教育研究会「RENCONTRES 28」, pp. 5-9, 2014.
・「初修フランス語教育における共通教材を用いた 3 つの授業実践」, 有富智世・西岡安奈・前田美樹, 関西フランス語教育研究会「RENCONTRES 28」, pp. 30-34, 2014.
・「フランス語教育の可能性 -教科書『なびふらんせ 1』とデジタル教材「Web〈なびふらんせ-1〉」-」, 有富智世・喜久川功・服部悦子・山田敏之, 関西フランス語教育研究会「RENCONTRES 30」, pp. 10-14, 2016.
・「フランス語教育とデジタル教科書」, 有富智世・喜久川功・安藤博文・内田智秀・服部悦子・山田敏之, 関西フランス語教育研究会「RENCONTRES 31」, pp. 57-61, 2017.

1.「デジタル教科書」の授業時導入のために

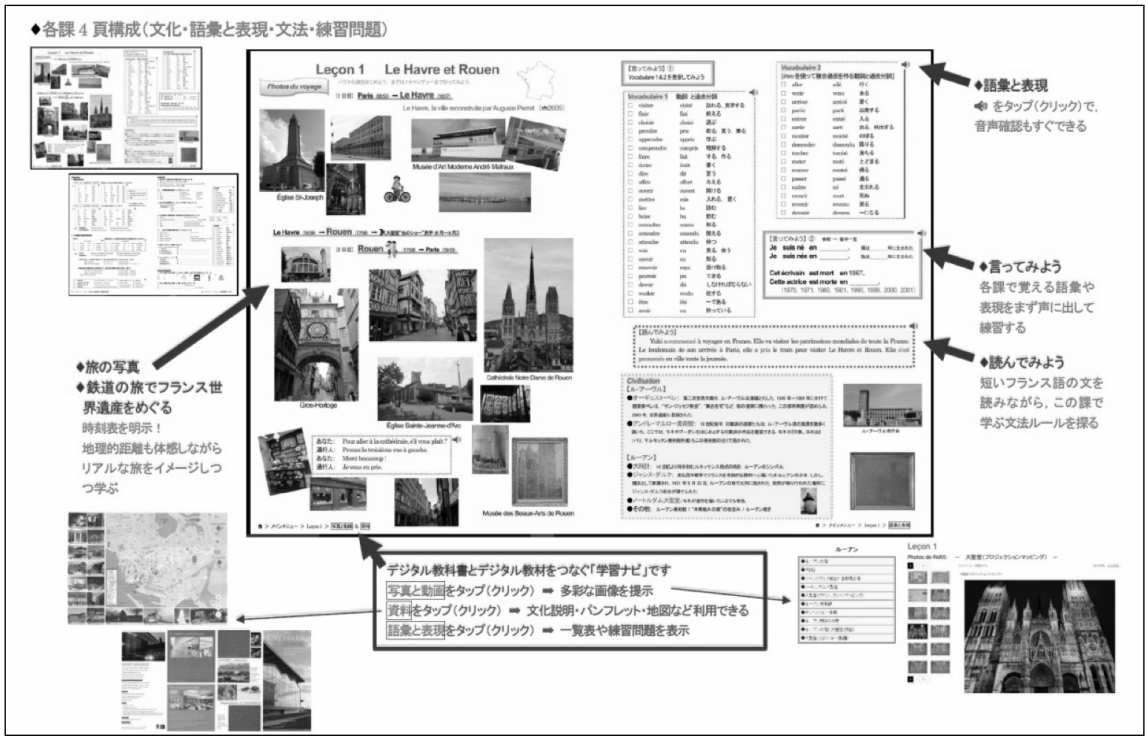
文部科学省では 2020 年始動に向けて「デジタル教科書」の検討を進めているが、大学等におけるフランス語学習では、「教科書」はもっぱら紙媒体が主流である。初等・中等教育を「デジタル教科書」で学んだ世代の大学進学は遠い未来の話ではない。高等教育機関での語学学習に適応する「デジタル教科書」の検討が急がれる。そこでまず、現在の学習状況に合致し、授業時に導入可能な「デジタル教科書」の開発を行った。先行研究成果物であるデジタル教材「Web〈なびふらんせ〉」[2]を発展的に展開して制作した「デジタル教科書（教員版）」である。

以下に、構成および機能の概要を示す。

○「教科書（紙）」と同様のスタイル（見え方）に設定〔下図〕

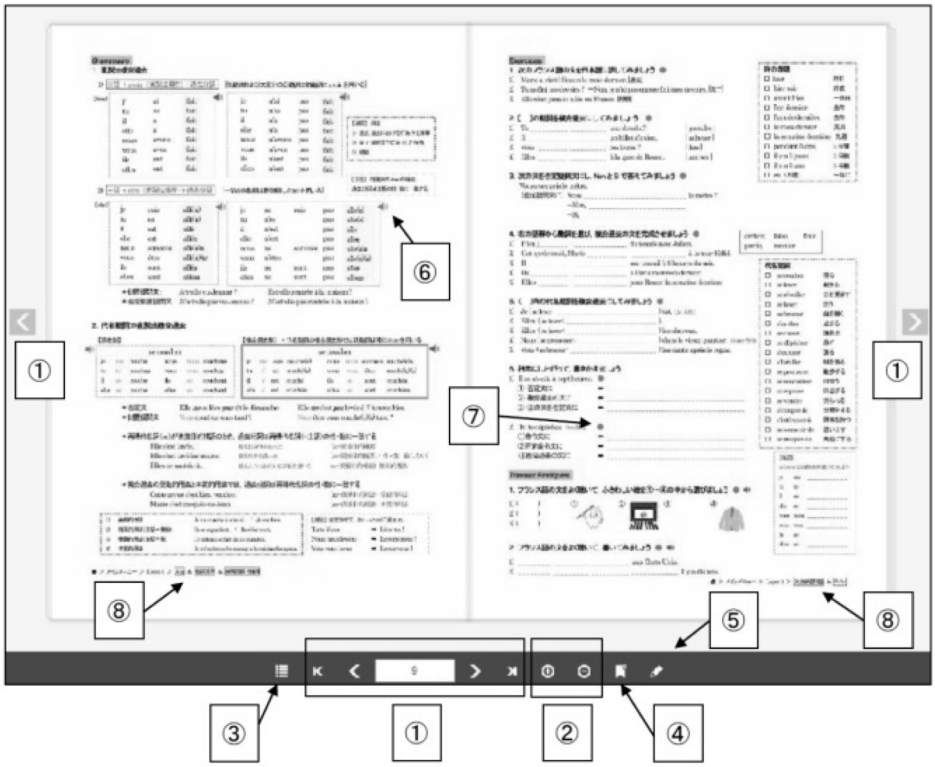


○デジタル教材「Web〈なびふらんせ〉」の学習コンテンツとのリンク〔下図〕



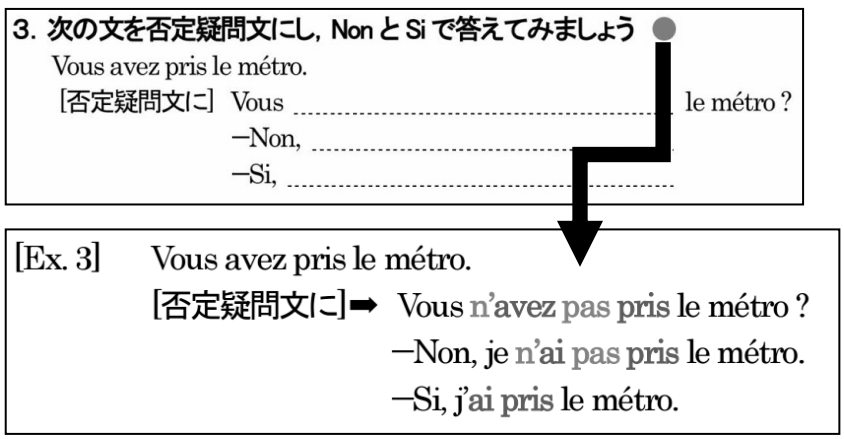
[2] 教科書『なびふらんせ 1』，有富智世・喜久川功・黒田恵梨子・田母神須美子・服部悦子，株式会社朝日出版社，2016 と連携させて学べる学習支援デジタル教材「Web〈なびふらんせ-1〉」，有富智世・喜久川功，（http://navifr.fj.tokoha-u.ac.jp/）2012－現在に至る．（フリーで提供・PC 並びにスマートフォン対応）〔科学研究費基盤（C）〔課題研究番号 26370678〕の助成を受けた〕

○PC 使用時の画面構成と機能〔下図〕



※図中の番号に対応する機能

① ページの移動
② 教科書の「拡大・縮小」
③ 目次を表示（目次から目的のページへ瞬時に移動）
④ 付箋機能（注意事項および練習問題等の追加を挿入可能）
⑤ ペンツールの起動
⑥ **🔊マーク**をクリックで「音声」の再生
⑦ **●マーク**をクリックで「解答」の表示
⑧ デジタル教材「Web〈なびふらんせ〉」に速やかにアクセス可能
※モバイル使用時〔iOS（iPad・iPhone など）・Android 端末〕も同様に使用可能
※「解答」の表示例
●マークをクリック（タップ）で新しいウィンドウを表示：「解答」表示〔下図〕

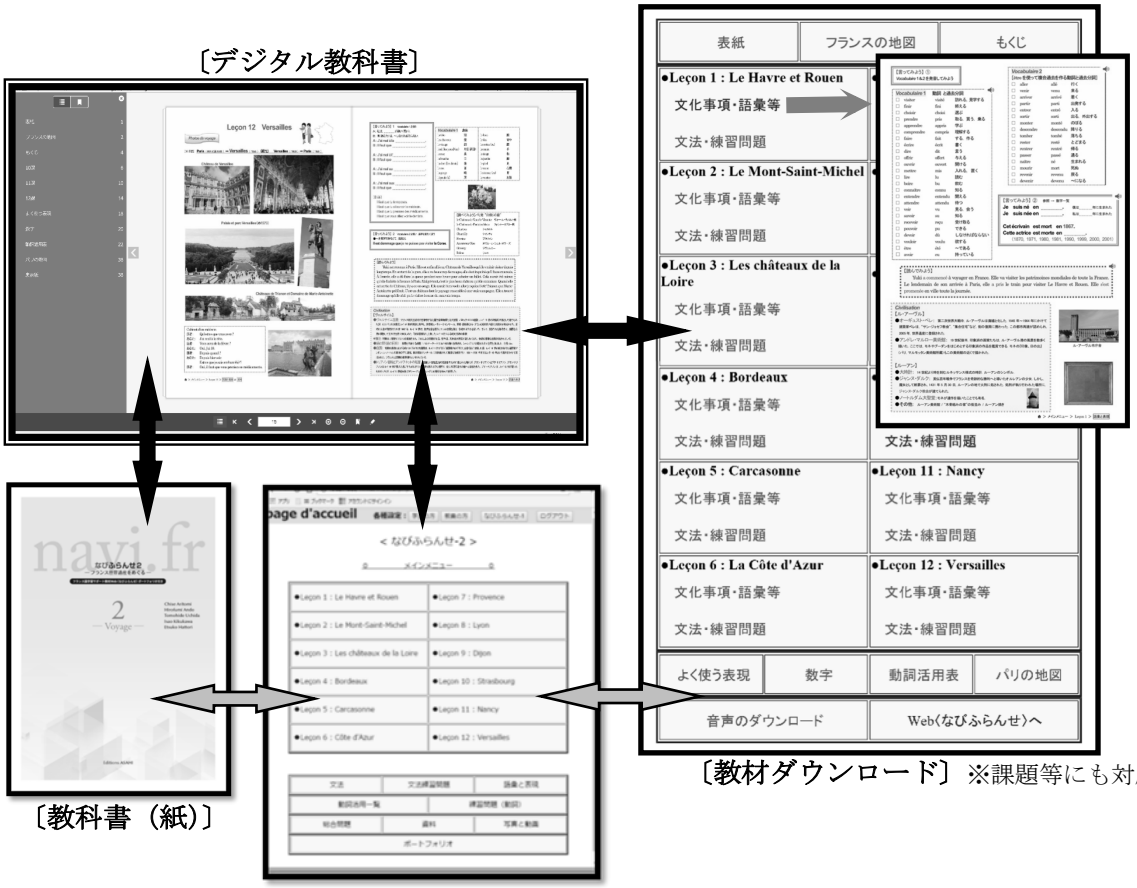


※ペン対応の PC やスマートデバイスでは解答表示画面上に指摘や書き込み等も行える

2.「デジタル教科書」を中核とする“教材の一体化”

ICT を活用した教科書・教材において、紙媒体の有用性も満たした教材の提供は、様々な学習の可能性を拡げる。そこで、「教材ダウンロード」システムを「デジタル教科書」を中核とする“教材の一体化”に組み入れることを考案した。

○「教材ダウンロード」システムの付加（“紙”と“デジタル”の各利便性の融合）〔下図部分〕



上記の図（全体）を見れば、「デジタル教科書（教員版）」を授業時に導入して使用した場合、学習時における実用性は保証されると理解できるだろう。また、授業外の学習においても、学習資料の提供、課題のダウンロード、課題提出に関する指示および Web を介した提出方法や学習記録としての分類・保存（ペーパーレス）まで、様々な可能性も見出せる。

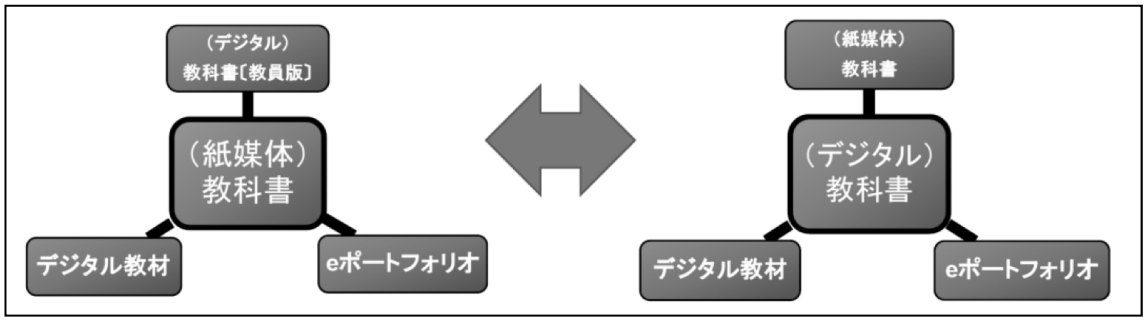
さらに、「デジタル教科書」が「デジタル教材」と連動することから、デジタル教材の学習サイクルに組み込まれている“e ポートフォリオ”との連携もでき、教材の一体的な使用の実現となる。

3.「デジタル教科書（学習者版）」:「これから」を想定して…

スマートデバイスの急速な普及という現状を鑑みても、今後、ICT を活用した「デジタル教科書・教材」の需要に応じていく必要があることは容易に想定される。ゆえに、「デジタル教科書（教員版）」は、本来の目的である学習者のための「デジタル教科書」の制作を見越して開発

した。紙媒体の教科書から「デジタル教科書」を中心とする授業形態への移行が促進された際には、「デジタル教科書（教員版）」をベースに、学習者にとって必要な機能の追加等を行って学習者版に変換する。例えば、練習問題の解答等は表示を削除し、課題提出やグループ学習、アクティブ・ラーニングのための機能を追加して授業内外の学習に呼応する連携機能を設ける。

授業において使用する教科書の形態を“紙媒体”とするか“デジタル”とするか、いずれにしても以下の図のように、紙とデジタルの双方の利点を活用し、“教材の一体化”で学習環境を整えるならば、これからの語学教育の進展に柔軟な対応が臨めるのではないか。



高等教育機関における「デジタル教科書」導入を活性化へと向かわせるため、「デジタル教科書（教員版）」は「教科書（紙）」と併用できる形を想定で設計した。「デジタル教科書」の黎明期である“いま”に適合する形を考慮しての結果である。しかし、本形態は、主教材が「デジタル教科書」になったとしても“教材の一体化”による有益性と実用性というレベルにおいて、“総合力を備えた教育ツールの一体化”に変わりはないものと見なせるだろう。

おわりに

教育のデジタル化への対応と検討のために、一斉授業と自主学習を繋がりある学びにし、フランス語学習の初めの一歩をしっかりとサポートする学習環境の整備を探究してきた。授業時使用の「教科書（紙）」の制作から本教科書と連動させて学べる「デジタル教材」の開発を行い、語学教育における主教材の移行を視野に入れた「デジタル教科書」の検討に至っている。

本稿で示した「デジタル教科書（教員版）」の授業時導入は、文法説明や練習問題の明示および解答表示、さらに現地資料を用いた様々な学習等を円滑に展開でき、効果的な使用が期待できる。いま最も重要な課題は、優れた教科書・教材の開発と精査が推進されることである。したがって、本稿で示したような「デジタル教科書」の開発とフリー提供からまず始め、複数の教材による授業実践が広く実施されることで、ICT を活用した教科書・教材の検討が様々に拡張するものと考える。語学教育に携わる教員それぞれが、これからのフランス語教育のあり方を模索し、“いま”と“これから”の課題と真摯に向き合い、従来型の授業形態に同期させつつ新たな方策を考察することが必要な時期に至っているのではないか。

REMERCIEMENTS

Nous remercions les personnes et organisations suivantes qui nous ont apporté leur soutien :

Alliance française Association France Aichi
（アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会）
APEF（公益財団法人フランス語教育振興協会）
École de mode Ueda Yasuko（上田安子服飾学校）
Éditions Asahi（朝日出版社）
Éditions Surugadai（駿河台出版社）
Hakusuisha（白水社）
Sanseido（三省堂）
Sanshusha（三修社）
Société Japonaise de Didactique du Français（日本フランス語教育学会）
Université Kwansei-Gakuin, Section Français（関西学院大学仏文研究室）

LE COMITÉ D'ORGANISATION DES RPK 2018

Julien BOGAERS, Alexis D'HAUTCOURT (Secrétaire adjoint), Zélia BAUDRY, Yoshitaka FUJITA, Rika HIRASHIMA (Buffet) , Maiko IMANAKA (Inspectrice des comptes), Seiko KISHIMOTO (Préactes / Bulletin), Miki MAEDA (Secrétaire générale), Sylvain MOKHTARI, Anna NISHIOKA, Jiro NOZAKI, Loïc RENOUD (Préactes / Bulletin), Kaori SASAKI (Secrétaire adjointe), Bertrand SAUZEDDE, Azusa TAKAHASHI (Préactes / Bulletin), Yu TAMURA (Buffet), Eriko TANIGUCHI (Trésorière), Seitaro YAMAKAWA (Responsable du site).

RENCONTRES 32-2

date de publication : 7 juillet 2018

Rencontres Pédagogiques du Kansaï

contact@rpkansai.com

http://www.rpkansai.com/

ISSN 1347–0507